私の自慢の教え子

校　長　　武井　正明

先日懇親会で、たまたま大山先生と隣になった。
こうしてみると、普段仕事以外の話をする時間の余裕がないことに気づく。３学期も無事スタートし、互いに少し安堵した中での会話となった。

そこで、巻東中野球部顧問時代の教え子でもある大山先生が「校長先生が仰った話で、今でも憶えていることがあるんです」「ん？」
「『明日は娘と映画を観に行くから、練習は無しにする』って。それまで家族の話は聞いたことがなかったので…」
そうそう、思い出した。あれは娘にせがまれてアルカディア小ホールで観た、ポケモンのジラーチ 2000 年の眠り（正しくは千年）だ。どうせ子供向けのアニメだから、ついて行って寝てればいいだろ、と高を括って観ていたら、ジラーチが長い眠りに就く直前、友達に言い残した「ぼくたちは…ともだち」で一気に涙腺崩壊の大号泣。一緒に観ていた娘が、恥ずかしさで固まってしまうほどの失態を演じたから、よく憶えている。

へえ～、そんなこと勇生は憶えていたんだ。
「それと郡市大会、岩室球場で巻西に負けて、巻まつりの日に最後のミーティングで武井先生が「スピード＆チャージ」（野球部だより）で、３年生ひとりひとりに書いたメッセージを泣きながら読み上げていって…。それまで高校で野球を続けようと思っていなかったのが、急に悔しくなって、帰る玄関で、仲間に『俺、高校行って野球やるわ』って宣言したことを憶えています」

嬉しいなあ。あのミーティングが勇生の高校野球のきっかけになっていただなんて…。吉中の皆さんは、イメージできないかもしれない。大山先生は現在長身で、細面の好青年、二児の父親だ。当時から、笑った時のえくぼと八重歯は変わらないけれど、中学時代は小柄で、お母さん似の丸顔だった。
私は、彼が練習に取り組む真摯な姿勢や、ダブルプレーで身体を逆回転に捻ってショートに送球する動きに非凡なものを感じていた。しかし如何せん、打撃では球を芯で捉えても、どうしても球威に圧され負けてしまう。技術ではなく、体格の差に泣いたのだ。
レギュラー選考に学年を考慮しないのは私の主義。中学最後の舞台で、勇生は１桁の背番号ではなかった。それがどれほど悔しかったことか。そしてその時の経験が、今の彼の、指導者としての礎になっていることは、想像に難くない。

それから 22 年が経った。偶然、同じ吉中の校長と教諭という間柄になった。そして、そんな想い出話ができることに、ありがたい縁を感じずにはいられない。
彼は今、ホンモノの指導者への道を歩いている。私の自慢の教え子だ。